

あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

An impress Group Company

各 位

2025 年 7 月 25 日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

動物の目から世界を見てみたら——人気の鳥類学者が贈る動物行動学の超入門書 『君たちはなぜ、そんなことしてるのか？』発刊

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『君たちはなぜ、そんなことしてるのか？ 東大准教授のひそやかな動物行動学講義』を発刊しました。

「むっちゃおもしろい先生によるおもしろい学問への誘い。
動物行動学は科学におけるエンターテインメントや！！」
仲野徹氏（大阪大学名誉教授）推薦！



人間をミツバチの巣に案内する鳥、キリンの首が長い本当の理由、カメレオンのオスは顔模型にも威嚇する、クモはどんな時に大きな巣を張るのか、虫はなぜ、電球の周りを飛ぶのか、誕生日がわからない者たち、そして、死すら訪れないヤツら…。

君たちはなぜ、そんなことしてるのか？
君たちはなぜ、そんなふうに生きてるの？

鳥や虫、魚、哺乳類、単細胞生物まで、多様な動物の行動や生き方を取り上げます。
ファーブル、ローレンツ、ティンバーゲン、ドーキンスなど歴代の科学者たちの知の探究、科学的な物の見方・考え方をユーモアあふれる解説で紹介します。

神話という「なぜなぜ物語」

なぜ世界があり、そこに様々な生き物がいて、人間も存在するのか。

聖書によると、神が「光あれ」と言ったので光ができ、天地万物、様々なものを作って良しとされ、最後に自分に似せて人間を作ったという。

古代エジプト人によると、日が昇り、日が沈むのは、太陽神が毎日、船に乗って天空を巡るからである。

日本の昔話によると、イヌが4本足なのは、神に足を1本もたらったからである。そして片足を上げてオシゴするのには、神より賜った足を汚さないためである。

北米先住民のクリンギット族の伝承によると、人間はガラスが作ったものである。最初は石から作ったのだが、作るのが大変な上に頑丈すぎるので、落ちると作りに直したのでは人は惨めに死ぬのだという。

北米夫の「ロコ」なるマンボウ昆虫記によると、マダガスカルにはこんな伝承がある。

主神の息子であるアタコロイノナが地上に降りたものの、あまりの醜態のため地中深く姿を消してしまった。神は息子を捜索するために地上に家来を送った。これが人間である。ところがアタコロイノナは見つからない。仕方ないので家来は時々、指示を仰ぐために使者を天に送ることにした。これが死である。

以後、天からの指示もないので、人間はお阿いを立てるために死に擬しているという(ただし、この神話が実在するものかどうかは今ひとつ定かでないとか)。

という具合に、神話や昔話を紐解けば大概のことは説明されている。内容については神話ごとに意見が異なるにしても、なかには日本神話のように、人間の起源



るほど厳密に実験していたことがわかるだろう。

実際、フーバーは叙情的な記述に対して「このように感じていることを許してほしい」といった書き方もしており、科学的な客観性と叙情的な印象を、自覚的に使い分けていたことがうかがえる。これは物語と科学を分ける重要な点の1つだ。

動物行動学へ続く道

人間は、動物をずっと見ていた。その理由は様々だったろう。

原始時代のヒトが狩猟採集生活をするうえで、周囲の動物に目を配るのは重要に違いない。それは獲物の動きを知る、ヒトを襲うような動物の行動を知る、などだ。獲物の種類や習性を知らずに、持ち回りも釣らない。猛獣や毒ヘビの居場所や行動を知らなければ、危険で仕方がない。生きるために必須の知識だったろう。

あるいは動物の行動を通して、外界の様子を知ることもあったはずだ。実際、アフリカのミツオシエという鳥は人間をミツバチの巣に案内し、蜂の巣を壊してもらおうという「導鳥」があった。鳥のほうに残った蜜や幼虫などのおこぼれに預かるわけだ。

この時、鳥のために「聴走」を少し残しておかないと、次はライオンの居場所が案内されると言われている。

この逸話は事実であることが2016年の研究で確かめられている。モザンビークのヤオ族の男は「フルフ」の聞こえる特有の音を出し、ノドグロミツシエに「案内してくれ」という信号を送る。鳥のほうも、この音を聞くことで、人間を誘導する確率が高くなる。どうやら長年をかけて、人間と鳥の間でそういつた関係が築かれたよう。

また、この行動は鳥の集団内で学習によって次世代に伝えられているはずなの



いう概念を揺るがしたのである。例えば、生物が助け合う行動は「種を保存するために努力する」と理解されていたが、現代の生物学では否定されている。

この辺りを決定づけたのは1964年、ウィリアム・ハミルトン(1936-2000年)が提唱した「包括的適応度」の概念、そして1976年にリチャード・ドーキンス(1941-)が発表した「利己的な遺伝子」だろう。

ハミルトンの包括的適応度というのは、「自分と同じ遺伝子は両親や兄弟姉妹も一定の確率で持っている。自分自身が繁殖して残す遺伝子だけでなく、血縁者を通じて残る遺伝子もまるごと全部考えよう」という意味だ。ちよつとわかりにくいかもしれないが、簡単な算数なので、お付き合いいただきたい。

ヒトのようにオスとメスで有性生殖し、半分ずつ遺伝子を出し合う2倍体生物の場合、子どもは両親から半分ずつ遺伝子を受け継ぐ。だから、自分の持っている遺伝子が子どもに伝わる可能性は1/2である。



ウィリアム・ハミルトン

もしあなたに兄がいた場合、兄が自分と同じ遺伝子を持っている確率は？

まず、その遺伝子が母親由来である可能性が1/2、父親由来である可能性が1/2だ。そして、親から子へ、ある遺伝子が受け継がれる可能性は1/2。よって母親由来で同じ遺伝子を持っている可能性が1/2 × 1/2 = 1/4。父親由来の場合も1/4。合わせて1/2となる。つまり、兄弟姉妹でもいいが、自分の子どもと同じ血縁度である。

では兄弟姉妹の子どもである甥・姪は？ 兄弟姉妹との血縁度は1/2だったが、その子どもと同じ遺伝子を持つ確率は1/4。甥・姪と自分の孫は血縁度でいえば同じ価値なのである。

これは、なぜ直後の子どもを世話するだけでなく、家族や血縁者が助け合うのか、という問いに対する答えである。さらに、半倍体性の社会性昆虫の場合はもっと不思議なことになる。半倍体性というのは、ミツバチのように、女王蜂が交尾するとオスが生まれ、ワーカーは卵から生れで生まれる



ドーキンス

〇もくじ

- 1 章 人間は、説明したがる生き物である
- 2 章 科学とは何なのか
- 3 章 原始、人は観察者であった
- 4 章 動物行動学という学問
- 5 章 動物行動学の始祖たち
- 6 章 行動学の三博士
- 7 章 生き残ることを諦めない——繁殖の戦略
- 8 章 食うほうも食われるほうも大変だ——捕食の戦略
- 9 章 動くヤツらと動かないヤツら——移動の戦略
- 10 章 科学の作法をすこし
- 11 章 はみ出しものたちの生物学
- 12 章 客観性とか再現性とかいうもの
- 終章 今日からあなたも観察者
- 「おわりに」に代えて——おすすめブックガイド

〇著者略歴

1969(昭和44)年、奈良県生まれ。東京大学総合研究博物館・特任准教授。京都大学理学部卒。同大学院理学研究科博士課程修了。専門は動物行動学。研究テーマはカラスの生態、行動と進化。著書に、『カラスの教科書』『鳥類学者の目のツケドコロ』『カラスは飼えるか』『カラスはずる賢い、ハトは頭が悪い、サメは狂暴、イルカは温厚って本当か?』『もしも世界からカラスが消えたら』などがある。長年の観察により、ハシブトガラスの言葉が少しくらいはわかるようになった。

〇書誌データ

書名:『君たちはなぜ、そんなことしてるのか? 東大准教授のひそやかな動物行動学講義』

著者:松原始

発売日:2025年7月28日

定価:1980円(本体価格1800円)

仕様:46判、336ページ

<https://www.yamakei.co.jp/products/2824063650.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。

さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:松本大輔、証券コード:東証スタンダード市場9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：綿

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yama-kei.co.jp

<https://www.yama-kei.co.jp/>